

日韓発掘調査交流に参加して

奈良文化財研究所では、2006年度に韓国・国立慶州文化財研究所と「発掘調査交流協約書」を結び、それぞれの研究所の研究者がお互いの発掘調査に長期参加する交流研究をおこなっています。今回はその5年目にあたり、私は2010年11月29日から12月28日まで慶州に派遣され、新羅王京遺跡、四天王寺址、チョクセム遺跡の発掘調査に参加しました。

7世紀後半に創建された四天王寺址では、西面回廊西側で検出された鎮壇具の取上げ作業に携わりました。また、著名な大陵苑の東部の古墳密集地区に位置するチョクセム遺跡では、2基の積石木槨墳の断割調査をおこないました。鎮壇具の取り上げ作業も、積石木槨墳の調査も初めての経験だったため、担当の研究者と何度も話し合い、慎重に掘り進めていきました。日本ではできない貴重な調査に参加でき、私にとって大変有意義な発掘調査となりました。

調査に加わったいずれの現場でも、遺構の規模やその数の多さに圧倒されましたが、発掘作業を通じ日韓の遺跡の共通点や相違点を肌で実感でき、また、韓国の発掘調査方法も学ぶことができました。これらは自ら発掘をおこなうことでしか経験できないことで、発掘調査交流の重要な意義だといえます。

今回の調査交流では、多くの韓国の若手研究者と接する機会がありました。会話では私の拙い韓国語を必死で理解しようとして頂き、調査の面でも生活の面でも暖かい親切心と多大なご支援を頂きました。このような研究者同士の交流も双方にとって大変よい刺激になると考えます。

今回の共同研究で得られた経験を活かし、今後も日韓交流の助けとなるよう努力していきます。

(都城発掘調査部 若杉 智宏)



四天王寺址での鎮壇具取上げ作業

韓日発掘調査交流に参加して

私は韓日共同「発掘調査交流協約書」にもとづいて、2010年5月17日から7月2日までの47日間、奈文研が実施している発掘調査に参加しました。

交流期間中には、藤原宮朝堂院地区と平城宮東院地区の発掘現場で調査をおこないました。私は現在、慶州で新羅王京の発掘調査を担当している関係から、近い時期に造営された藤原京と平城京について関心を持っていました。そのため、これらの発掘調査に参加できたことは非常に有益な経験でした。

日本での発掘調査で最も印象的だったのは、経歴と年齢を考慮した多様なチーム構成と役割分担、年間を通して空白なく進行する調査スケジュールでした。我々の研究所に比べはるかに構造的な調査運営体制は、奈文研において良質な調査成果を得ている基盤になっているようで、これは我々の研究所でも見習うべき点だと感じました。また、藤原宮の現場では、調査担当者以外にも様々な研究者が随時現場を訪れて調査内容について意見交換し討論しており、その姿勢は良い勉強になり、研究所らしい研究所の姿について再び考えるきっかけになりました。その他、周辺遺跡への踏査では、日本の遺跡の性格や復原整備事例を調査することができ、深い感銘を受けました。

47日間の短い日程で、二地域の発掘調査と数十箇所の遺跡を見学することができたのは、ひとえに奈文研の方々の積極的なご助力のおかげでした。このような良い機会を与えて下さった奈文研の皆様に心から感謝します。そして、5年あまりにわたり積み上げてきた二つの研究所の交流が今後も続き、学問的に良い成果が上がることを望んでいます。

(国立慶州文化財研究所 李 熙濬 翻訳 庄田 慎矢)



藤原宮朝堂院朝庭での実測作業